毛利元就

下

内館牧子

NHK出版

江苏工业学院图书馆
藏书章

毛利元就 下

一九九七年十月三日　第一刷発行

著者……内館牧子
ノベライズ……三原庸子
発行者……安藤龍男
発行所……日本放送出版協会
〒一五〇-八一 東京都渋谷区宇田川町四一-一
電話 〇三-三七八〇-三三八四(編集)
〇三-三七八〇-三三三九(営業)
振替 〇〇一一〇-一-四九七〇一

印刷・製本……図書印刷(株)

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。定価はカバーに表示してあります。
Ⓡ〈日本複写権センター委託出版物〉
本書の無断複写(コピー)は、著作権法上の例外を除き、著作権侵害となります。

©1997 Makiko Uchidate Printed in Japan
ISBN4-14-005261-9C0093

1456円

毛利元就 下

装幀……芦澤泰偉

装画……奥田元宋「玄溟」より

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

毛利元就

目次

それぞれの別れ……5
鬼と化す……53
厳島合戦……133
三子教訓状……199
月山富田城総攻撃……260
元就旅立つ……347

主な登場人物の関係図

〈毛利家〉

- 美伊の方 ----- 藤野（美伊の待女）
  - 毛利元就
    - 杉の方（元就の育ての親）
    - 妙（側室）
    - 香（側室）
    - 小夜（側室）
  - 隆元
    - 寿
      - 幸鶴丸（のちの輝元）
  - 元春（のちの吉川元春）
    - 美々
  - 隆景（のちの小早川隆景）
    - 阿古
  - 可愛

毛利家家臣 —— 志道広良、井上元兼、桂元澄、赤川元保、児玉就忠、国司元相、粟屋元親、福原貞俊、平佐就有

〈尼子家〉

- 尼子晴久
  - 義久（嫡男）
    - みつ
- 尼子国久（晴久の叔父・新宮党）

尼子家家臣 —— 亀井秀綱、河副久信、山中鹿介

〈大内家〉

- 大内義隆
  - 亀童丸（嫡男）
    - おさい

大内家家臣 —— 陶晴賢、内藤興盛、相良武任

〈村上水軍〉

- 村上虎吉 —— 加芽

野田次郎（家臣）

〈貿易商〉

堀立直正

それぞれの別れ

出雲遠征の大敗から一年が過ぎようとしている。

天文十三年（一五四四）、山々が鮮やかな緑を取り戻しても、美伊の顔色はすぐれなかった。いやむしろ病は少しずつ重くなるようで、原因不明のめまいと吐き気に襲われて、寝つくことの多い日々が続いていた。

「女はつらいとき、苦しいとき、まず化粧をすることじゃ。そして、新しい着物を着れば、たいがいの病など治ってしまうわ」

美伊を力づけようと、紅をさしてやったり鮮やかな色の小袖を羽織らせたりと、杉が励ます。

「これは……我ながら美しいのう」

小袖をなでながら、美伊の声にも、ほんのひととき晴れやかさが戻る。

「病は治りましたな」

これまた、ほんのひとときほっとする杉だが、そんな杉にうなずきながら藤野は美伊を見つめ

た。薬師もわからぬ病である。四十余年も美伊に付き添ってきた藤野にも、どうしてやることもできないのだ。

「美伊、寝ておらずともよいのか」

元就が入ってきて、起きている美伊を見て声をかけた。そして、にっこりとうなずく美伊の前に腰をおろすと、その顔をじっと見つめた。美伊はそんな元就の気配から、「何か？」と尋ねるように笑顔で元就を見つめ返した。

「ふむ……」

まだ躊躇の色があったが、元就は決心したように口を開いた。

「実は美伊に話しておらぬことがあってな。話せばさらに体が悪うなりそうで」

美伊ばかりか、杉と藤野も何事かと元就を見守った。

「実は、竹原の小早川家より申し入れがあってな。毛利の次男でも三男でも、どちらか一人くれぬかと……」

小早川といえば、鎌倉時代から瀬戸内に勢力を広げてきた名家である。

「養子ということにござりますか」

美伊の声は震えていた。

「ああ。本家の沼田小早川も、分家の竹原小早川も、当主が死んでしもうた。今、本家の当主は、目の見えぬ繁平殿じゃ。家の先行きが安泰とは言えぬゆえ、必死なのであろう」

元就は正直に答えた。実はこの申し入れは昨年からあったのだが、元就自身も意を決しかねてここまで来ていたのだ。この話を知っているのは、長男の隆元と重臣の志道広良だけである。

「元春は元服をすませたとはいえ、まだ十五歳。徳寿丸は十二歳にござりまする。尼子は、強き当主のおらぬ小早川を放っておくわけがござらぬ。必ずや、攻め落とさんと狙いましょう。さような家に養子に出しては、幼き我が子はいかなる目にあうかわかりませぬ。美伊はどちらも手放しとうござらぬ」

美伊の強い言葉に大きくうなずいて、杉が続けた。

「殿、ぴしゃりと断りなされ。よその殿様と違うて、わしは側室を置かず、ほかの女に子を産ませぬゆえ、三人の息子は宝じゃと言うておやりなされ」

「そのとおりじゃ。されど……」

迷いを残した元就の言葉じりを藤野が受けた。

「藤野は養子に出すべきと考えまする。小早川家は、因島村上水軍と同盟関係にありまする。殿、水軍を手にいたすは大きいことにござりますぞ」

美伊と杉の強い視線を受けつつ、藤野は言った。

「そのことじゃ。わしは今まで、尼子と大内の顔色を見ては手伝い戦さをし、大切な者を失ってきた。もはやたくさんじゃ。そのためには力をつけねばならぬ。子の一人を出し、毛利が小早川に入るは大きなことじゃと、つい考えてのう。ただ、小早川を通じて海に伸びるはよいが、息子

一人の命と引き換えにはできぬ」
毛利家当主としての元就と父親としての元就の葛藤が、ここまで決断を遅らせていたのだ。
「命を失うと決まったわけではありませぬし、ここは考えどころにござりますな」
藤野が押した。
「美伊はやりとうない。死ぬると決まらずとも、家族がちりぢりになるのは嫌じゃッ」
元就をにらみつけるように言ったとたん、美伊の体がふわっと崩れた。めまいに襲われたのだ。
「お方様ッ」
支える藤野に、
「案ずるな。いつものことじゃ」
美伊は何事もなかったかのように元就の前を繕ったが、そんな美伊に、
「美伊、やはりやめような。いずれ黙っておっても子は巣立つ。ともに暮らせるあいだは短いゆえ、離れてはならぬ。養子はやめる」
元就は言った。そしてうなずく美伊の笑顔を見ながら、これでいいのだと思った。
しかし隆元と広良の意見は違っていた。というのも、諸国の動きを見ると、毛利だけが家族仲よく体を寄せ合って、などと言ってはいられない情勢になってきていたのだ。特に尼子晴久の攻勢は目をみはるばかりで、今や石見東部を押さえ、大内との争点になっていた銀山もがっちりと固めて備後まで進出していた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「尼子晴久の進撃、何かに取りつかれておるようじゃ」
隆元と広良を前にしてつぶやく元就に、広良は言った。
「経久に取りつかれておりまする。今や伯耆も因幡も押さえたに等しく、もはやその力、山陰から山陽へと広く及んでおりまする」
「経久にか……」
元就はまたつぶやいた。そうかもしれぬという思いがあった。
事実、広良が言うように、晴久は外へ向かっては凄まじい攻勢をかけながら、内においても経久の匂いを全て消し去ろうとしていた。月山富田城の主殿から見渡せる限りの庭の木々を植え替えさせ、部屋部屋の調度品まで全て廃棄させたのだ。理由はただ一つ、それらは経久が愛し育てたものだったからだ。
「大殿の全てを憎むは、大殿を認めているからじゃ」
「殿の世であることはわかっておりまする。しかしそれは、庭木や置物を替えることではのうて、殿のお働きで示すことにございます」
萩の方や亀井秀綱が諫めたが、耳を貸さないばかりか、経久から譲られた太刀を突きつけ、
「秀綱、この太刀とともに隠居いたせ」
と命じたのだ。経久の戦いぶりを全て見てきた秀綱さえ目障りだったのだ。
こうして秀綱が去り、萩の方も庵を結んで富田城から去り、晴久のそばに残ったのは、新宮党

を率いる国久と、その娘で晴久の正室であるみつだけとなったのだった。いやもう一人、裏切りによって小倉山城を追われた吉川興経が富田城にとどまってはいたが、それはともかく、晴久は経久の影を払拭した新たな尼子によって、新たなる天下取りへと歩を進め始めたのである。

だが、こうして尼子が勢力を伸ばしたということは、それだけ大内の勢力が弱体化したわけで、毛利にとっても油断できない状況だった。それは出雲遠征の大敗以後、戦さに背を向けてしまった大内義隆に起因していた。このままでは大内家は滅びてしまうと心を痛める陶隆房や内藤興盛らの意見を排し、京の公家風な雅な暮らしに明け暮れる今の義隆には、晴久に立ち向かう気力はなかった。そこで義隆に失望した隆房や興盛がひそかな動きを始めていたのだが、それはあくまでも大内のためという大義名分のもとにであった。

そんな諸国の動きがあれこれと話題にのぼったのち、

「で、殿……」

いい機会と見た広良が、あらためて元就の顔を見つめて口を開いた。

「養子の話、断るということを藤野殿よりうかがいましたが……」

「ふむ」

「殿、小早川に養子を出しなされ」

元就を見つめる広良の顔には、「否」を言わせぬ決意があった。

「されど、今、幼き子を出すにはあまりにも危うい家じゃ」

「今の世、どこにおっても危うござる。安芸の国人は盟約を結び、ともに安全を約束してはおりまするが、それとて、状況が変われば即座に裏切る危険をはらんでおりまする。同じ危険なら、養子を送って毛利の力をつけるほうに賭けるがよろしいと存じまする」

「毛利の幼き子が小早川に入れば、必ずやその子を亡き者にせんとするやからが出てまいる。誰にとっても、力なき当主を倒して小早川をおのれのものにするには、またとない機会じゃ」

「殿、何ゆえ先々の不幸ばかりを数えあげまするか。あるかないかわからぬ不幸を予測し、おのれの動きを押しとどめるは、愚かなことにござりますぞ」

「愚かでよい。子の命にかかわることじゃ」

かたくなに言い返した元就に、

「父上、隆元も養子を出すことに賛成にござります」

きっぱりと言い切った隆元は、「ふむ?」と驚く元就に、

「小早川なら、元春より徳寿丸」

と、常にも増して再び力強く言い切ったのだった。これを聞いて、広良はにんまりして続けた。

「広良もそう思うておりました。徳寿丸様は人なつこくて明るく、明けっぴろげな海の武士たちと、必ずや馬が合いまする」

「それに、知恵が回ります。野駆けをしておっても、元春は私に負けるものかと正面からぐいぐいと挑んでくる。その一本気な気迫は、兄の私でさえ恐れをなすほどにござる。ところが徳寿丸

ときたら、こっそりと近道をして先に着いておる。それで『兄上二人は遅うございますなあ』などと申すゆえ、野駆けのたびに元春と大喧嘩にございます」
「殿、こすからい商人が出入りする海沿いを押さえるは、徳寿丸様のような方がぴったりにございますぞ」
「母上のことは、隆元が説得いたしまする。父上、今こそ毛利が海に出る道を確かなものにすべきときにございましょう」
広良と隆元が交互に説いたが、それは言われるまでもなく元就にもわかっていることなのだ。
「だが、正直言うて、息子は三人とも他人にくれるはもったいないのじゃ。それに、万が一にも死んだりされては、わしも生きていとうない。末っ子の徳寿丸は特に美伊がかわいがっておるゆえ、美伊の病がさらに悪うなるやもしれぬし……。さりとて、力をつけねば毛利が滅ぼされるやもしれぬし……困ったのう」
元就の迷いは続く。
「ようぼやかれますな。いっそ殿を養子に出しとうござる」
広良が隆元にささやくと、隆元も笑ってうなずき返した。

「わしに会いにきてくれたは嬉しいが、わしは田舎の領主ゆえ、京にさえも、さほど興味がなくてのう。わしとつきあっても、堀立殿には儲けが出ぬぞ」

「ほう。それでは致し方ござらぬな。儲けが出ぬでは商人は成り立ちませぬ」
堀立直正はそう言いながら、言葉とは裏腹に余裕のある笑顔で元就から隆元へと目を移し、また元就へと笑顔を戻した。直正は、大陸貿易で大きな勢力を持つ商人である。
「あいすまぬのう」
素直に謝る元就だが、これはわざわざ直正がみずから望んで会いにきた訪問で、それも井上元兼の手引きによるものだった。元兼は、村上水軍の虎吉を厳島に訪ねたとき、そこで陶隆房たちに鉄砲を見せていた直正と出会ったのだ。元兼は既に毛利家の乗っ取りは諦めていたが、小早川家を通して海へと大きく商売を広げ、せめて財力で元就をしのぎたいと、小早川家への仲立ちを頼みに虎吉を訪ねていたのだ。まさか小早川家から毛利に養子の話が来ていようとは知る由もない元兼の動きだった。
「噂に聞く智将、元就殿にぜひ会いたい」
直正は元兼にそう言った。元兼にしてみれば面白くなかったが、直正との取り引きを条件に今日の日が実現したのである。
「元就殿、何ゆえ、京に興味を持たれぬ。戦乱の世にあって、日本じゅうの大名が京の権威を手に入れんとしておるというに」
「京に行ってどうなるというのじゃ。天下を取ろうとも思わぬわしには、なんの価値もない場所じゃ」

「天下を取ろうと思わぬ？」
「思わぬ」
「この安芸国において、今や並ぶ者のない力を持っておられるお方の言葉とも思えぬ。天下を取ろうと思わぬのなら、何ゆえ国に力をつけておられる」
「家族を守るためじゃ」
「家族？」
「ああ、家族と、家族同様の家臣たちのためじゃ。わしは、京などより、この者たちとのつつがない暮らしを守るほうがずっと大切じゃ」
「驚きましたな」
直正は、京をめざさぬと言い切った元就にあらためて興味を持ったようで、
「それがしも、京には関心がござらぬ。海の向こうと取り引きをしておると、どうも京は古い。これからは、海の向こうの物が限りなく入ってくる世になりまする。見たこともない酒、見たこともない武器、聞いたこともない考え方。殿、ともに新しいものを求めませぬか」
潮焼けした顔にぎょろっと光る目をいちだんと輝かせて言ったが、
「わしは、新しいものには関心がないわ」
元就はそっけなかった。だが直正は苦笑しながらも、なおも誘った。
「一度、厳島にお運びくだされ。異国の品々、数多（あまた）用意してござりまする。新しき品を見、新し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com